

先週の礼拝メッセージ(2023年10月29日) ベン牧師

「何を望むのか」 ルカによる福音書 4:16-30

イエス様が、ご自分が育ったナザレに帰られた時のお話です。当時のナザレは人口が千人ほどの小さな村でした。イエス様はこの時すでにガリラヤ地方など広い地域をまわり、神の国を宣べ伝え、多くの癒しの奇跡を行なっていましたから、その噂はナザレにも聞こえていました。自分たちの村から出た者が有名になっていると、ナザレの人々にとって、イエス様はヒーローのような存在だったことでしょう。そのイエス様がナザレに帰ってきたというので、人々は大喜びで、会堂でのイエス様のお話を聞こうと集まってきました。会堂管理者からイザヤ書を受け取られたイエス様は、61章を開き読み上げられたあと、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と宣言されたのです。これは、「私こそがここで預言されているメシアだ」ということです。人々は喜びましたが、イエス様をメシアとしては受け入れませんでした。それよりも、イエス様が各地で行われた癒しや奇跡をここでも期待していたのです。(23節)中には、「この人はヨセフの子ではないか」と言う者もいました。彼らの心を見抜いてイエス様は、「よくしておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。」と、彼らの期待通りにはならないと語られ、それどころか、旧約聖書から、エリヤがサレプタのやもめ(異邦人)を助けた話(列王記上 17章)や、エリシャがシリア人ナアマン(異邦人)を癒した話(列王記下 5章)を引き合いに出されたのです。ユダヤ人には、自分たちは神に選ばれた民だという自負があります。イエス様はあえて、神が助けたのは選民ユダヤ人ではなく異邦人だという話をされたのです。人々は憤慨しました。イエス様はただ、聖書から引用して語られただけです。しかし人々は、自分たちのアイデンティティを崩すようなそんな話は聞きたくないと思われ、怒り、イエス様を崖に連れて行って石打ちの刑にして殺そうとしたのです。彼らにしてみれば、自分たちの期待していることはしてくれないばかりか、抛り所と



している神の民としてのプライドを打ち壊すことを語るイエス様に対して、完全に腹を立てたのです。結局は自分を先に立たせているのです。

しかしイエス様は、作り話や自分の意見を語ったのではなく、聖書の言葉をそのまま語られただけなのです。ここに両者の大きな違いがあります。イエス様は常に、人々が欲することではなく、聖書の真理をそのまま伝えていきます。一方、人々は、自分たちに都合の良い、耳障りの良い言葉を求めています。これは現代でも起こっていることです。

アメリカや日本の福音的と言われている教会に急速に入ってきて広がっている、間違った教えが二つあります。一つは、繁栄の福音と言って、人々を安心させ、励ましはするけれど、福音が語られていないのです。心地よい言葉やこの世での繁栄を語り、十字架や罪の問題、悔い改めは一切語られないのです。聖書には、神の愛や慰め、赦しは多く語られていますが、厳しい裁きや罪の指摘、悔い改めることなども、それ以上に大切なものとして語られています。聖書が教えていることを、混ぜも減らしもせずに語ることが重要なのです。もう一つは、プログレッシブセオロジーと言って、神様も進化しているという考えです。2000年前に罪であっても、現代は様相も環境も変わっているのだから、昔罪であったと神様が考えていたことも現代では罪ではないと考えるのです。自分の都合の良いように聖書を解釈してしまっています。なぜこのような神学が広がるのでしょうか。それは、このナザレの人々と同じように、自分たちに都合の良いことを語ってほしい、神の願いを私が聞くのではなく、私の願いを神に聞いてほしいと考えるからです。しかし、聖書が罪と言っているなら、それは何千年経っても罪なのです。

神様が私に何を望んでおられるのかを先に立たせることは重要です。もちろん私たちが自分の願いを持つことは何一つ悪いことではありません。しかし、クリスチャンにとって最大の願いは、私たちがイエス様のようなことではないでしょうか。私たちは何を望んで教会に来ているでしょう。何を望んで主の前に出ているでしょう。励まし、恵み、もちろんです。ただそこで止まるのではなく、聖霊に満たしていただき、イエス様のために生きる者となろうではありませんか。